沼津市明治史料館通信

二〇一一年七月
通巻106号

■ぬまづ近代史点描71
山本繁次郎と妻雷公
■江原素六とその周辺52
松濤権之丞とその遺族
■企画展のお知らせ

（左）山本繁次郎肖像（右）同夫人富士子肖像
２点とも大正４年（1915）釈宗演題辞
山本徳樹氏寄贈

ぬまづ近代史点描　71

山本繁次郎と妻雷公

沼津市下香貫八重の正見寺の山門前に南無妙法蓮華経を大書した題目塔が立っている。左側面に彫られた文章によれば、文久三年（一八六三）幕府軍の兵士となった山本繁次郎は、元治元年（一八六四）六月「野州之戦」（天狗党討伐）に従軍、その後「防長征伐」では芸州口で戦い、鳥羽・伏見の戦争にも参加したとある。自分が生き残れたことを感謝し、亡くなった戦友たちを追悼するためにこの石塔を建立した旨が記されている。明治二九年（一八九六）に建てられ、同時に永代回向料一〇〇円が納められた。ただし、現在建っている碑は、古い石碑の文字を新しい石に再刻し、平成九年（一九九七）に建て直されたものである（そのため「野州」を「野川」とするなど誤りがある）。この碑文（旧）は、『香貫・我入道の石仏・石神』（一九九八年、沼津市教育委員会）に掲載されている。

山本繁次郎については、関係者からの談話を集めた、長尾大学編『無我翁と雷公』（一九四〇年、静岡県駿東郡静浦村口野・永昌寺・仏光閣発行、沼津市・藤井印刷所印刷）という書籍があり、彼の経歴が判明する。石碑には「元沼津産山本繁次郎晴吉」とあるが、同書では、沼津生まれとは明記されていない。故郷は清水であり、同地に二軒あった、清水次郎長の実家と同姓同名の山本三右衛門家の出であったとする。正見寺には繁次郎の墓石のほか、「祖先墓」もあり、三右衛門（万延二年没）、勘七（安政六年没）といった名前が彫られているが、どちらが繁次郎の父なのか、沼津の人か清水の人かについても明記されていない。

ただし、繁次郎が沼津生まれか否か、山本家が清水の家なのか沼津の家なのかは別にして、彼の父親は伊豆国君沢郡長浜村（現沼津市）の出で、実家の菩提寺は住本寺であり、同地の漁師高梨家とは親戚関係にあった。また、繁次郎の祖母の実家は駿東郡一本松新田（現沼津市）の木村家だったということもあり、彼が沼津地域に縁深い生まれ育ちであったことは間違いないようだ。そのため、繁次郎は少年時代、沼津宿で魚屋を営んだ野際家（高梨家から養子になった人が当主）で丁稚奉公をした。同家を飛び出した後は各地を流浪し、やがて徳川幕府の陸軍兵士になる。「ある富豪」の一人息子の身代わりだったという証言もあるので、旗本が知行地の領民などから徴募した兵賦として、歩兵になったのであろう。形式上、「徳川の幕臣」の最底辺に組み入れられたことになる。後年、懐旧談として「会津戦争の話」をしたこともあるので、鳥羽・伏見後も脱走・抗戦を続けたのかもしれない。

明治初年には横浜へ出て、保土ヶ谷宿の町火消出身の鈴村要蔵（『幕末維新大人名事典』）という親方の下で沖仲仕（港湾労働者）となった。明治二三年（一八九〇）鈴村の没後、その事業を引き継ぎ、横浜港に出入りする船へ石炭を運び入れる回漕業、請負業を営み、多くの人夫を擁する山本商店（屋号は鈴繁）の店主として成功する。店は横浜元町にあり、弁天丸・好日丸・繁栄丸・天龍丸といった蒸気船を擁し、数百名の労働者を差配した。自宅は横浜石川町にあったが、郷里沼津の城内町に宏壮な別荘「今日庵」を構えた。旧幕臣千野氏から譲り受けた土地だった。

勝海舟や清水次郎長に私淑したほか、徳川慶喜の葬儀に参列した際には戦友と昔話に花を咲かせたというエピソードもある。大正七年（一九一八）八月五日、七六歳にて没した。横浜の店は、妻の甥音次郎が養子となり継いだ。

波瀾万丈の生涯を送った繁次郎であるが、その人柄は温厚篤実、寡言真摯な人柄だったという。それと対照的なのが、妻の富士子であり、男勝りの女丈夫、女傑として知られた。気性が激しく、誰彼かまわず怒鳴りつけたことから、付いた綽名が「雷公」「雷婆さん」。

雷公こと山本富士子は、紀州日高郡三尾村（和歌山県美浜町）の西家の生まれ。郷里を離れ、大坂の侠客「土手草の金八」のもとで育ち、後には侠客会津小鉄に従った。また少女時代、土佐藩主山内容堂の屋敷に出入りしたほか、単身イギリスに渡ったこと、清国芝罘や北海道で暮らしたこともあったという。一少女がそのような冒険的行動をとることができたのかどうか不思議であるが、尋常な女性でなかったことは確かなようだ。

繁次郎と結婚したのは二七歳の時、明治十年代半ばだった。二人とも再婚だった。その後は、夫を助け家業を盛り立てた。繁次郎没後、横浜から沼津へ移り住み、城内の今日庵を売却し浅間町に転居、万松閣と称する小庵を建てた。その後、さらに幸町に移り、そこで亡くなった。昭和三年（一九二八）一〇月一七日、七三歳だった。養女の婿養子となった山本茂三郎は、沼津裁判所検事だった時に富士子に見込まれた人だった。

晩年の繁次郎夫妻は、円覚寺管長釈宗演に帰依し、横浜・鎌倉・和歌山のほか、沼津周辺の寺社にも石塔・鳥居などを多数寄進している。正見寺に立つ墓の文字も釈宗演の書である。

（樋口雄彦）

釈宗演の揮毫による山本家墓石

江原素六とその周辺 52

松濤権之丞とその遺族

戊辰戦争の際、江原素六は旧幕府陸軍の撤兵隊を率い下総に脱走し新政府軍と抗戦した。開戦に至る前、新政府との間に入って脱走軍を鎮撫すべく説得にあたった旧幕臣松濤権之丞が、激昂した撤兵隊幹部によって殺害されるという悲劇が起きた。慶応四年閏四月六日、上総国姉崎（現市原市）でのことであり、松濤を斬ったのは江原の同僚である撤兵頭並増田直八郎だった。もともと江原は恭順論者だったが、なぜか松濤の説得には応じず、彼を脱走軍（徳川義軍府）の本営がある姉崎へ送り出し、結果として殺してしまったことになった。

松濤は、外国奉行支配定役格同心、富士見御宝蔵番格騎兵差図役下役、小十人格軍艦役並勤方などを歴任し、小笠原諸島やフランスに派遣された経験も持っていた。海軍伝習通弁御用も仰せつかっているので、外国語もできたらしい。幕府瓦解後は勝海舟の指示を受け、江戸を脱走し抗戦を続けようとする旧幕府軍の説得工作を行った。

松濤権之丞（個人蔵）

江戸の松濤家に凶報が届いたのは閏四月一五日。勝は、松濤の死を二〇日に知り、妻子に金銭を送っている。権之丞には実子がいたが、まだ幼く、ともに小笠原島に渡航したことがある幕臣小花作助の次男秋作を養子にしていた。秋作は前年、幕府が雇用したイギリス軍人による海軍伝習の生徒に選ばれていた。その後、松濤家は徳川家に従い駿河に移住したが、秋作は離縁となり、東京に残った実父のもとに戻った。なお小花秋作は、明治七年（一八七四）遠州見付（現磐田市）に旧幕臣室賀竹堂が設立した明治学校という私立英学校の教員に雇用されたが、その後伊藤に改姓し、外務省に入り、条約改正掛、領事館書記生、外国郵便課長、大臣官房記録課勤務などを歴任している。

伊藤秋作（小花正雄氏所蔵）

松濤権之丞の妻安子は、移住先の静岡県で亡くなった。静岡市清水区興津の耀海寺には、「松濤家之墓」が残る。右側面には「休現院殿恭光日誠居士　皆遙院殿妙龍日成大姉」、左側面には「明治三年六月二十日俗名松濤一歩　明治六年十一月二十日俗名松濤権之丞妻安子」と彫られている。秋作の離縁後、明治二年六月には権之丞の実子泰近が家督を相続した。

松濤一歩・安子の墓
（静岡市清水区・耀海寺）

墓石の「松濤一歩」は権之丞のことであろうが、奇妙なのは彼の没年月日が明治三年（一八七〇）五月二〇日とされている点である。残された実子が幼かったため、家名存続のため、権之丞が存命であるかのようによそおい藩庁に届け出たためなのか。それにしても墓石にまで架空の日付を彫るであろうか。それとも一歩は権之丞とは別人なのだろうか。墓石は夫婦の墓にしか見えない。

実は、東京都文京区の西教寺にも「松濤権之丞之墓」がある。明治六年の火災のため、一一年（一八七八）に再建された墓石であるが、建てたのは山縣正房（十三、明治一二年三八歳で没）といい、海軍大主計になった旧幕臣・静岡県士族である。山縣と松濤との関係は不明である。

権之丞の遺児松濤泰近（一八六四～一九四二）は、幼くして父母を亡くしたものの、後に東京府下の区長を歴任する官吏となった。江原素六文書の中に、大正一〇年（一九二一）に麻布区長から麹町区長に転任する際に活版で印刷した挨拶状が残されている。泰近の息子は麻布中学校で学んでもいるので、江原は泰近と面識があったのだろう。ただし、泰近の亡父が権之丞であることを知っていたのかどうかはわからない。

松濤泰近（『麻布区史』より）

〈参考文献〉倉沢剛『幕末教育史の研究二』、鈴木高弘「小笠原島領有と小花作助―新発見の「小花日記」を中心にして―」（『専修大学附属高等学校紀要』第三〇号）、国立公文書館所蔵「叙位裁可書」、その他、河村壽仁氏のご教示

（樋口雄彦）

企画展のお知らせ

奥駿河湾を襲った地震・津波　史料にみる安政東海地震

東日本大震災による犠牲者の皆様に謹んで哀悼の意を表するとともに、被災者の皆様に心からお見舞い申し上げます。

この大震災を受けまして、本年の企画展は予定を変更して、緊急企画展として「奥駿河湾を襲った地震・津波　史料にみる安政東海地震」を開催致します。東日本大震災の被害、特に大津波の被害はとても衝撃的なもので、まるで映画のワンシーンのように非現実的な感さえあるものでした。しかし、「東海地震」の脅威が迫っているといわれており、津波による死者のうち７割が集中すると予想されている沼津市にとっては他人事ではありません。

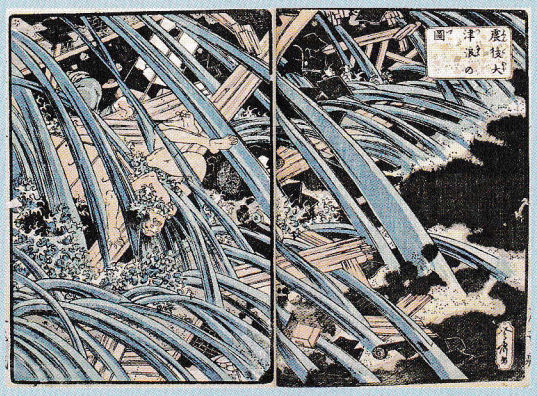
本展では約150年前、嘉永７年（1854）11月４日に発生した「安政東海地震」の被害の様子を、古文書等の史料を元に紹介するとともに、本展のために製作した沼津市全域の地形模型（1/2500）を展示します。

◎会　期　８月２日(土)～９月19日(月)
◎観覧料　大人200円　小人100円（市内の小・中学生は無料）

＜イベント＞

◆講演会（第１回沼津市防災講座）
演　題　奥駿河湾を襲った地震・津波
検証：明応・宝永・安政東海地震
講　師　都司嘉宣　東京大学地震研究所
会　場　沼津市文化センター　小ホール
日　時　８月24日(土)　13時開場・14時開演
入　場　無料　定員500名（定員を超えた場合抽選となります）
申　込　８月２日(火)～16日(火)
明治史料館まで、電話・メールまたは直接

◆ギャラリートーク（当館学芸員が展示解説をします）
期間中第１・２土曜日の11時から　申込・参加料不要（観覧料はかかります）



「震後大津浪の図」（『安政見聞録』より）

輝く静岡の先人展　江川坦庵とゆかりの人々〈沼津展〉

江川太郎左衛門英龍（号は坦庵）は、伊豆・韮山（現伊豆の国市韮山）出身で、幕末、海防政策や農兵の組織など数々の提言を行い、実行した名代官です。また、書画をよくした文化人、優れた教育者でもありました。この展覧会では、韮山代官の本拠地であった伊豆の国市韮山の江川家に伝わる坦庵とそのゆかりの人々に関する名品を一堂に紹介します。時代の先を見通す目を持ち、大変な努力の上に今日に続く礎を築いた坦庵の生涯を知ることは、多くの課題が山積する現代を生きる私たちに、きっと大きな勇気と指針を与えてくれることでしょう。

また、この展覧会は江川家に残存する約６万点の資料の中から「江川文庫史料総合調査」の10年間に及ぶ調査の成果を紹介するものであり、一挙公開は初めてのことになります。

当館で開催する〈沼津展〉は先行開催の〈静岡展〉とは、また一味違った展示になります。是非ご来館ください。

◎会　期　10月１日(土)～30日(日)　◎観覧料　一般300円

＜イベント＞

◆オープニングセレモニー
10月１日(土)　10：00～　当館１階ロビー

◆特別ギャラリートーク
日比野秀男　常葉学園大学
10月１日(土)　11：00～

◆特別講座
演　題　江川家の家風と坦庵
講　師　橋本敬之　江川文庫
日　時　10月15日(土)　13：30～15：00

◆ギャラリートーク
会期中の毎週土曜日　11時～・14時～
講師は毎週変わります。様々な切り口で坦庵に迫ります。
申込・参加料不要（観覧料はかかります）

沼津市明治史料館通信
第106号
平成23年7月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL055－923－3335
FAX055－925－3018
印　刷
みどり美術印刷株式会社